HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「うつせみの世の人なれば」：笠金村「天平元年己巳冬十二月の歌」についての考察
Author(s)	倉持, しのぶ
Citation	国語国文研究, 145, 1-13
Issue Date	2014-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93170
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_145_01-13.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「うつせみの世の人なれば」
——笠金村「天平元年己巳冬十二月の歌」についての考察——

倉持しのぶ

一

万葉第三期の歌人、笠金村には多くの長歌作品が残されている。その多くは行幸従駕などのいわば公的な場に関わって詠まれたものと考えられるが、それらの作品には詠まれた状況や詠歌主体である〈我〉について、何らかの設定がなされていることが多い。詳しくは別稿[1]に譲るが、「志貴親王挽歌」（巻2・二三〇～二三四）では〈親王の死を知らない我〉が葬列に出会うという劇的な設定がなされているし、「娘子に誂へられて作る歌」（巻4・五四三～五四五）では、家に残った妻の立場から行幸に従駕した夫への羨望が詠まれるという形が取られている。これらの設定により、前者では死者と直接関わりの無い第三者にも親王の死を悼むことが可能となり、後者では従駕した官人たちの優越感がくすぐられ、行幸先の宴席などが盛り上がるような趣向となっている。作品にとって設定が重要な役割を果たしているのである。

もちろん、金村作品の全てにそうした巧まれた設定を指摘できるわけではなく、二つの「吉野讃歌」（巻6・九〇七～九一二、九二〇～九二二）や、「難波宮行幸従駕歌」（巻6・九二八～九三〇）の詠歌主体などは特に注目されるようなものではない。しかし、上述した「娘子に誂へられて作る歌」以外にも女性仮託の歌が見られ（「神亀五年戊辰秋八月の歌」（巻9・一七八五～一七八六）、「天平五年入唐使に贈る歌」（巻8・一四五三～一四五五）、また旅先で娘子を得た喜びを詠んだ歌（巻4・五四六～五四七）があることなどからも、金村作品には詠歌主体や詠歌状況の設定へのある種の拘りがあったのではないかと考えられる。

そのような金村の長歌作品の中から、ここでは天平元年冬十二月に詠まれたとする題詞を持つ、巻九の長歌作品を取り上げて論じ、金村作品におけるそうした〈設定〉の性格を考察し、それが作品に何をもたらしているのかを明らかにしていく。

二

天平元年己巳の冬十二月の歌一首　并せて短歌

うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　磯城島の　大和の国の　石上　布留の里に　紐解かず　丸寝をすれば　我が着たる　衣はなれぬ　見るごとに　恋は増されど　色に出でば〈山上復有山者〉人知りぬべみ　冬の夜の　明かしも得ぬを　眠も寝ずに　我はそ恋ふる　妹がただか〈直香〉に（9・一七八七）

反歌

布留山ゆ　直に〈直〉見渡す　都にそ　眠も寝ず恋ふる　遠からなくに（一七八八）

我妹子が　結ひてし紐を　解かめやも　絶えば絶ゆとも　直に〈直二〉逢ふまでに（一七八九）

作品に詠まれているのは〈都にほど近い布留の里での旅寝を余儀なくされた男性官人の、都の妻への恋情〉とひとまず理解できるが、題詞に「天平元年己巳の冬十二月」とあることで、従来の研究ではその制作の背景について様々に論じられてきた。(2)『続日本紀』によれば、天平元年十一月、京と畿内の班田司が任ぜられ、多くの官人がその任に当たったことが推測される。また、万葉集に残された次のような歌からは、その任がかなりの激務であったことがうかがわれる。

天平元年己巳、摂津国の班田の史生丈部龍麻呂自ら経きて死ぬる時に、判官大伴宿祢三中が作る歌一首　并せて短歌

天雲の　向伏す国の　もののふと　言はるる人は　天皇の　神の御門に　外の重に　立ちさもらひ　内の重に　仕へ奉りて　玉かづら　いや遠長く　祖の名も　継ぎ行くものと　母父に　妻に子どもに　語らひて　立ちにし日より　たらちねの　母の命は　斎瓮を　前に据ゑ置きて　片手には　木綿取り持ち　片手には　和たへ奉り　平けく　ま幸くませと　天地の　神を乞ひ祷み　いかにあらむ　年月日にか　つつじ花　にほへる君が　にほ鳥の　なづさひ来むと　立ちて居て　待ちけむ人は　大君の　命恐み　おし照る　難波の国に　あらたまの　年経るまでに　白たへの　衣も干さず　朝夕に　ありつる君は　いかさまに　思ひいませか　うつせみの　惜しきこの世を　露霜の　置きて去にけむ　時にあらずして（3・四四三）

反歌

昨日こそ　君はありしか　思はぬに　浜松の上に　雲にたなびく（四四四）

いつしかと　待つらむ妹に　玉梓の　言だに告げず　去にし君かも（四四五）

天平元年の班田の時に、使葛城王、山背国より薩妙観命婦等の所に贈りし歌一首　芹子の果袋に副ふ

あかねさす　昼は田給びて　ぬばたまの　夜の暇に　摘める芹これ（20・四四五五）

班田史生丈部龍麻呂の死の原因は詳しく歌われていないが、働き盛りの官僚の自殺ということから、過労によるものであったと考えられる。「あらたまの　年経るまでに　白たへの　衣も干さず」という長歌の描写も、単に妻と離れた生活の不便というだけでなく、激務により身なりを構う暇もなかったことを窺わせる。葛城王の歌も班田の業務の多忙さの例証とされてきた。

こうした歌を根拠に、当該作品の制作の背景にも班田使の業務を想定し、

> 金村が班田使の一職員であり、自らの立場を歌ったのか、これも亦他人に頼まれて、女に贈るために作ったのか[3]

という推測や、

> 金村はこうした激務に従事する若い官人に同情を寄せて、その立場に立った歌を作り、人々に披露したのだと思われる。[4]

といった論が展開されてきた。もちろん、一方では、

> 平城京から南方へ約八キロの石上布留に官命で派遣された役人の妻恋いの歌。金村自身のことを詠んだものか否か不明。また班田使を詠んでいるのかどうかも未詳。[5]

という慎重な論も見られる。

問題は「天平元年己巳の冬十二月」という題詞にどれほどの意味を読み取るかということになろう。班田史生丈部龍麻呂の自死が大伴三中によって歌に詠まれた背景に、当時の班田使の激務が社会問題となるほどのものであったことを推定するならば、「天平元年己巳の冬十二月」という題詞を持ち、四四三番歌同様、「大君の命恐み」と官命による旅寝の辛さを詠んだ当該作品もまた班田使と関連づけて理解され得るものと思われる。

しかし、万葉集に納められた金村の作品（「金村歌集出」「金村歌中出」とあるものも含む）は、基本的に題詞に制作年次を挙げており、「己巳」という干支を記すのも金村歌の多くに共通する書式である。当該作品の「天平元年己巳の冬十二月」が直ちに制作背景に班田使を示しているとまでは言えないであろう。また、もし班田使に関わっての詠であれば、そうした状況をある程度題詞に示していたのではないかとも考えられる。同じ金村の巻四に所収された相聞歌では、「神亀元年甲子冬十月、紀伊国に幸す時に、従駕の人に贈らむが為に娘子に誂へられて作る歌」（巻4・五四三題詞）、「二年乙丑春三月、三香原の離宮に幸す時に、娘子を得て作る歌」（巻4・五四六題詞）のように、作歌の状況が明示されているからである。

以上のことから、本稿では当該作品を「班田使」と予め結びつけて考えることはせず、歌に詠まれた内容を考察していくこととする。

三

当該作品の表現で特に注目されるのは長歌冒頭の「うつせみの

世の人なれば　大君の　命恐み」という金村作品に独自の成句である。[6]

玉だすき　かけぬ時なく　息の緒に　我が思ふ君は　うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　夕されば　鶴がつま呼ぶ　難波潟　三津の崎より　大舟に　ま梶しじ貫き…（8・一四五三「天平五年癸酉春閏三月、入唐使に贈る歌」）

人となる　ことは難きを　わくらばに　成れる我が身は　死にも生きも　君がまにまと　思ひつつ　ありし間に　うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　天ざかる　鄙治めにと…（9・一七八五「神亀五年戊辰の秋八月の歌」）

この表現についてはすでに青木生子氏[7]、川崎庸之氏[8]、梶川信行氏[9]、井ノ口史氏[10]、村山出氏[11]らの論で言及されているが、総じてこれらの論では絶対的なものである「大君の命」に対しての「諦念」「諦観」という捉え方がなされており、本稿でも基本的には同様に考えている。

「うつせみ（うつそみ）」の原義が「現し臣」であることは大野晋氏の論[12]に指摘されているが、「臣」が「人」に近い意を持つということから、「うつせみ（うつそみ）」とは本来「この世に生きている存在」を意味する語であると考えられる。金村作品の「うつせみ」を考える上では次のような例も参考となるであろう。

うつせみし　神に堪へねば　離れ居て　朝嘆く君　離り居て　我が恋ふる君　玉ならば　手に巻き持ちて　衣ならば　脱く時もなく　我が恋ふる　君そ昨夜　夢に見えつる（2・一五〇）

うつせみと　思ひし時に〈一に云ふ「うつそみと思ひし」〉　取り持ちて　我が二人見し　走り出の　堤に立てる　槻の木の　こちごちの枝の　春の葉の　繁きがごとく　思へりし　妹にはあれど　頼めりし　児らにはあれど　世間を　背きしえねば　かぎろひの　もゆる荒野に　白たへの　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちいまして　入り日なす　隠りにしかば　…　うつせみと　思ひし妹が　玉かぎる　ほのかにだにも　見えなく思へば（2・二一〇、或本歌二一三もほぼ同じ）

一五五番歌は天智天皇崩御時の婦人の歌で、「うつせみ」であるゆえに天皇の死という神意には抗えないことが詠まれており、人麻呂の「泣血哀慟歌」（二一〇、二一三）では「うつせみ（うつそみ）」の存在としてこの世にあることを自明と受け止めていた妻が「世間」に背くことができず亡くなり、その姿を求めて探しに行くが叶わないことが詠まれている。生身の人間としての限界を認識したときに「うつせみ（うつそみ）」という表現が選び取られていることがわかる。

金村の一七八五番歌では、長歌冒頭に〈得難い人身〉を得た「我が身」であることが詠まれ、その「我が身」すらも委ねようとする相手が「うつせみの世の人」であるために別れを余儀なくされるという内容が続く。そのため、「うつせみの世の人」という表現は「肉体を具えたこの世の存在」であることを意識した表現であったと考

えられる。[13]

当該作品においても、「うつせみの世の人」である〈我〉の「衣はなれ」、「妹がただか」を恋い夜も寝られず、また妹の結んだ「紐」を解かない、と詠んでおり、「うつせみの世の人」に〈肉体を具えたこの世の存在〉が意識されていると考えてよいであろう。

また、この表現の特徴は金村作品において男性官人が「うつせみの世の人」以外にどのように詠まれているのかを見ることでより明確になる。

ものゝふの　臣の壮士は　大君の　任けのまにまに　聞くといふものそ（3・三六九）

大君の　行幸のまにま　ものゝふの　八十伴の緒と　出でて行きし　うるはし夫は…（4・五四三　「神亀元年甲子冬十月、紀伊国行幸時、娘子に誂へられて作る歌」）

…沖つ鳥　味経の原に　ものゝふの　八十伴の緒は　廬りして都なしたり　旅にはあれども（6・九二八　「神亀二年冬十月、難波宮行幸歌」）

「金村之歌中出」とされる三六九番歌は石上大夫の、

大舟に　ま梶しじ貫き　大君の　命恐み　磯廻するかも（3・三六八）

に和したものであるが、『新編日本古典文学全集』頭注の、

三六八の「大君の命恐み」の語からうかがえる石上大夫の、君命否み難く後ろ髪引かれる思いで赴任した、という弱気の本音に対して、すじ論の立場からたしなめた歌。

という指摘が参考になろう。「ものゝふの臣の壮士」とは、積極的に君命に従い、辛い旅をも厭わない存在として詠まれているのである。

また、五四三、九二八番歌に共通する「ものゝふの八十伴の緒」は行幸に従駕する官人であり、天皇と行動を共にし、行幸先の景を楽しみ、荒野に都を出現させることもできる存在である。

こうした表現と比べたとき、「うつせみの世の人」という表現は「大君の命」によって旅を余儀なくされる存在、この世にある身として天皇を絶対とする理に逆らうことのできない存在として男性官人を位置づけていることがうかがわれるであろう。

金村作品に見られる三例の「うつせみの世の人なれば　大君の命恐み」であるが、当該作品で特徴的なのは、この表現が長歌冒頭に用いられているということである。そのため、「うつせみの世の人なれば」は続く「大君の命恐み」にかかるのはもちろんであるが、長歌全体をいわばその影響下においていると考えられる。この点については後で詳述することとする。

さて、まず長歌冒頭は〈官人意識〉のもと、「石上　布留の里に」旅寝をする辛さが詠まれていくのだが、「石上　布留の里に」を修飾する句として、「磯城島の　大和の国の」が用いられていることは注目に値する。万葉集中、「磯城島の」を冠する「大和」の例は当該例以外に五例ある。

磯城島の　大和の国に　人さはに　満ちてあれども…（13・三二四八）

磯城島の　大和の国に　人二人　ありとし思はば　何か嘆かむ（13・三二四九）

磯城島の　大和の国は　言霊の　助くる国ぞ　ま幸くありこそ（13・三二五四）

磯城島の　大和の国に　いかさまに　思ほしめせか　つれもなき　城上の宮に　大殿を　仕へ奉りて　殿隠り　隠りいませば…（13・三三二六）

磯城島の　大和の国に　明らけき　名に負ふ伴の緒　心努めよ（20・四四六六）

「磯城島の」が「大和」に掛かるのは、崇神天皇・欽明天皇の宮が置かれたことによる。そのため、「磯城島の大和」は本来「都」を表し、大和地方、狭義の「大和国」の意を経て、日本国全体をも指すようになった[14]。そのため、巻十三の歌においては解釈が分かれるものもある[15]。

当該長歌では「磯城島の　大和の国の　石上　布留の里に」とあることから、「大和」は大和地方を表していると考えられる。「石上布留の里」を詠むためには敢えて「磯城島の　大和の国の」を用いなくとも歌意は通じるし、むしろ長歌冒頭からの流れでは、この二句は「大君の命」によって「磯城島の　大和の国」のどれほど遠い地へ赴くことになるのだろうかと読み手に予想させるような役目を果たす。そこに、「石上　布留」と続くことで、この「磯城島の　大和の国」が狭義の大和地方であり、都にほど近い場所を指すことが明らかになる。ある意味、肩透かしとも言える表現である。

もちろん、狭義の「大和」の、更に小地名である「布留」と詠むことで、実際の場所を細かに特定していく意図もあったものと思われる。このことは、反歌第一首で「布留山ゆ　直に見渡す都にぞ」と都との近さが詠まれていることとも関わるであろう。都からすぐ近く、「大和」は「大和」でも「大和地方の」と限定をした歌い方になっているのである。

次に、地名「石上　布留」が万葉集に詠まれている例では、

石上　布留の山なる　杉群の　思ひ過ぐべき　君にあらなくに（3・四二二）

石上　降るとも雨に　障まめや　妹に逢はむと　言ひてしものを（4・六六四）

石上　布留の早稲田を　秀でずとも　縄だに延へよ　守りつつ居らむ（7・一三五三）

石上　布留の早稲田の　穂には出でず　心の内に　恋ふるこのころ（9・一七六八）

石上　布留の神杉　神びにし　我やさらさら　恋にあひにける（10・一九二七）

石上　布留の神杉　神さぶる　恋をも我は　さらにするかも（11・二四一七）

石上　布留の高橋　高々に　妹が待つらむ　夜そふけにける（12・二九九七）

我妹子や　我を忘らすな　石上　袖布留川の　絶えむと思へや
（12・三〇一三）

のように、実際の地名というよりは「序詞」としてほとんどが恋の歌に用いられている。その中で性格を異にするのが次の例である。

石上　布留の尊は　たわやめの　惑ひに因りて　馬じもの　縄取り付け　鹿じもの　弓矢囲みて　大君の　命恐み　天ざかる　夷辺に罷る…（6・一〇一九）

石上乙麻呂が土佐国に配流になった時の歌で、「石上　布留の尊」は乙麻呂を指す。そもそも「石上　布留」は石上氏の本貫と考えられており、金村と乙麻呂との関係からも、当該作品でこの地名が詠まれる背景について様々な推測がなされてきた[16]。もちろん、当該作品制作の背景に乙麻呂との関係を考えることもできるであろう。しかし、そうした事情は歌には直接詠まれていない以上、まずは〈旅寝する我〉の所在地として「石上　布留の里」を考えてみるべきではないか。

その際、上記の例からもわかるとおり、「石上　布留」には相聞的な表現を導く序としての性格が色濃く表れている。〈我〉が旅寝をする地が他ならぬ「石上　布留」として詠まれていることは、もちろん、実際の状況を反映したものであったとも考えられるが、当該作品に詠まれる恋情という主題と関わらせてこの地名が詠まれている点を積極的に捉えてもよいのではないだろうか。

四

都にほど近い「石上　布留の里」に旅寝をする〈我〉は、その旅寝を「紐解かず　丸寝をすれば」と表現する。「丸寝」（まろね・まるね）は「ごろ寝。旅さきなどで着物をきたままで寝ること。」（『時代別国語大辞典　上代編』）と考えられ、家持の歌にも、

大君の　遠の朝廷と　任きたまふ　官のまにま　み雪降る　越に下り来　あらたまの　年の五年　しきたへの　手枕まかず　紐解かず　丸寝をすれば…（18・四一一三）

とある。また、その紐については、

我妹子し　我を偲ふらし　草枕　旅の丸寝に　下紐解けぬ
（12・三一四五）

草枕　旅行く背なが　丸寝せば　家なる我は　紐解かず寝む
（20・四四一六）

のような例から、『時代別国語大辞典　上代編』の「ひも」の項にも、

当時の衣服は、埴輪などで見ると、男女ともにえりを左まえに合わせ、上下二か所を紐で結んでいる。歌に詠まれているヒモは衣の紐が多いが、ほとんどが許しあった男女が逢って互いの

紐を解き、別れに当たってはそれを結び合った習俗を下にふまえている。また、別れて次に逢うまでは紐を解かずにいるべきものとされた。紐が自然に解けたり、自分で結ぼうと思ってもなかなか意のようにならなかったりするときは、人に恋せられている証拠とも考えられていたようである。

とされている。当該長歌でも旅先での一人寝を詠み、家や妻への恋情が募ることを詠む長歌後半や、反歌第二首の「我妹子が結ひてし紐を解かめやも」という表現につながるものと考えられる。

長歌は続いて「我が着たる衣はなれぬ」と詠むが、〈衣（きぬ・ころも）・袖がなる〉ことを詠んだ集中の用例には次のようなものがある。

須磨の海人の　塩焼き衣の　藤衣　間遠にしあれば　いまだ着なれず（3・四一三）

須磨の海人の　塩焼き衣の　なれなばか　一日も君を　忘れて思はむ（6・九四七）

凡ろかに　我し思はば　下に着て　なれにし衣を　取りて着めやも（7・一三一二）

志賀の海人の　塩焼き衣　なれぬれど　恋といふものは　忘れかねつも（11・二六二二）

紅の　八入の衣　朝な朝な　なれはすれども　いやめづらしも（11・二六二三）

我が命し　衰へぬれば　白たへの　袖のなれにし　君をしそ思ふ（12・二九五二）

大君の　塩焼く海人の　藤衣　なれはすれども　いやめづらしも（12・二九七一）

苗代の　小水葱が花を　衣に摺り　なるるまにまに　あぜかかなしけ（14・三五七六）

…別れにし　妹が着せてし　なれ衣　袖片敷きて　ひとりかも寝む（15・三六二五）

紅は　うつろふものそ　橡の　なれにし衣に　なほ及かめやも（18・四一〇九）

死別した妻が着せてくれた、着古した衣を表す三六二五番歌の用例以外、「なる」には衣服が肌に馴染む意と、夫婦や恋人などと馴染む意が掛けて詠まれている。当該長歌にはそうした意はなく、三六二五番歌同様、自分の着物が実際に着古され、垢染みたことを言うだけである。先に挙げた丈部龍麻呂の死に際して詠まれた挽歌でも、

…あらたまの　年経るまでに　白たへの　衣も干さず…（3・四四三）

とあり、『新編日本古典文学全集』頭注が、

身の回りの世話をする妻もおらず、かつ多忙であったことをいう。正倉院文書にも、写経生が「穢衣（えい）を洗はむがために」休暇を申請している例がある。班田事務は十月一日から翌年二月末

までと期限があり、班田使は繁多な業務に明け暮れた。一七八七も「我が着たる衣はなれぬ」と歌い、若き日の葛城王も多忙を訴えている（四四五五）。

とする。当該作品が詠まれた状況も、「身の回りの世話をする妻もおらず」という状態であったと思われるが、当該作品では「多忙」故に衣を洗う暇もないということを詠んだ訳ではないだろう。反歌第二首に詠まれているように、「我妹子が結ひてし紐」であるから解かないのであり、その結果垢染みた衣をそのまま着続ける、と詠んでいるのである。だからこそ、そうした衣を「見るごとに恋は増されど」と自らの恋情を詠む表現へと続いていくと考えるべきではないだろうか。

衣を洗ふのは女の仕事であるから、衣服がよごれたのを見ると妻を思い出すが。

という『日本古典全書』の頭注は実際的なことを考えればもっともな指摘ではあるが、ここでは「我妹子が結ひてし紐」を解いて衣を換える（洗う）ことを拒んで、あえて垢染みた衣を着続けようとするほどの〈我〉の妹への思いが詠まれていることに焦点を当てるべきであろう。

ところで、旅にあって家郷の〈妹〉への恋情を詠むこと自体は、万葉集においてしばしば見られる。行幸従駕の歌においては「家郷思慕」は一つの型として定着していたと言ってもよいであろう。その代表的な例が、巻一の軍王の歌である。

讃岐国の安益郡に幸す時に、軍王、山を見て作る歌

霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　むら肝の　心を痛み　ぬえこ鳥　うら嘆け居れば　玉だすき　かけの宜しく　遠つ神　我が大君の　行幸の　山越す風の　ひとり居る　我が衣手に　朝夕に　反らひぬれば　ますらをと　思へる我も　草枕　旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに　網の浦の　海人娘子らが　焼く塩の　思ひそ燃ゆる　我が下心（1・五）

反歌

山越しの　風を時じみ　寝る夜おちず　家なる妹を　かけて偲ひつ（1・六）

反歌で夜毎に〈家なる妹〉を思うことを歌うなど、「眠も寝ずに」「妹がただか」を恋うことを歌う当該作品に内容的にも通じる。

しかし、そうした類似の一方で、軍王の作品に比べたとき、当該作品に詠まれた恋情は、長歌に詠まれた垢染みた衣の様子や、反歌第二首での「直に逢ふ」ことへのこだわりなど、より実体的な生々しさを伴うことが確認できる。

また、同じく旅寝を嘆くものであるが、軍王の歌が「山越しの風」を詠むように〈山越しの思い〉[17]、家郷を遠く離れての恋情であるのに対し、当該作品は反歌第一首で「布留山ゆ直に見渡す」「遠からなくに」とあるように、その近さが強調されている。妹との間を隔てる「山」がないにも関わらず逢うことが叶わないということは、「磯城

島の大和の国」の中でも、狭義の大和地方の布留の地で旅寝をすることを詠んだ長歌前半の表現と相俟って、もどかしい思いを掻き立てる要素となったであろう。

この〈我〉の恋情は、「色に出でば人知りぬべみ」と露わになることが恐れられている。原文「色二山上復有山者」とあり、「山上復有山」が「出」を表す戯書となっていて、これが『玉台新詠』に基づくものであることは夙に『代匠記』（初稿本）によって指摘されている。金村作品の表記に関しては金村本人によるものとする見方が主流であり[18]、本稿でもそれに従う。また、こうした表記から金村が『玉台新詠』的な男女の情を題材とした詩の世界を当該作品で想起させたのは、漢詩文に造詣に深かった石上乙麻呂を読み手として当該作品が詠まれた、とする先行研究の説[19]も乙麻呂個人を想定するかどうかはともかくとして、それなりの読み手を想定して当該作品が作られているという点では肯うべきものであると考える。

ところで、『玉台新詠』では「山上復有山」の句は旅先にある夫の身を案じる妻の詩に用いられており、旅寝を嘆く男の立場から詠まれている当該作品とは設定を異にしている。また。元の詩では夫が家を「出」ていることを表すこの表現は、当該作品では恋情が露わになることを表しており、当該作品におけるこの表記は『玉台新詠』の詩句を単純に取り入れただけではないことが確認できる。つまり、当該作品の趣向は読み手に対し、単に詩句の出典の知識を問うだけではないのである。そのことから、当該作品には読み手の理解を期待した一種の〈戯れ〉が他にも仕掛けられている可能性が考えられる。

そこで、あらためて当該作品を見ていくと、長歌末尾に「ただか（直香）」、反歌第一首に「直に見渡す（直見渡）」、反歌第二首に「直に逢ふまでに（直二相左右二）」とあるように、「直」という表記が繰り返し用いられており[20]、しかもそれらが全て〈妹への恋情〉と結び付く表現となっていることがわかる。先にも述べたように、「直に見渡す」は旅先と都との近さ故に募る恋情をより際立たせる表現であり、「直に逢ふまでに」は文字通り生身の相手との再会を願う表現である。

「ただか」に関してはこの語の解釈をめぐっていくつかの論がある。『時代別国語大辞典　上代編』は、

> 消息・動静などの意をあてる説もあるが、全用例にはあてはまらない。「直」や「正」の字でタダを表記しているのは、意味まで表しているとみてよいし、カは、シラカのカと同じく、そのものの精粋・本体などの意ではなかろうかとし、そこから君や妹というのとほとんど同じく、その者をさし当てて言う語とする説がほぼ妥当であろう。

とし、坂本信幸氏は「ただか」の表記に仮名書き例以外では「香」が用いられることに注目し、

> カはその人固有のものであり、その人に纏わり付いて離れないもので、それによりその人の魅力や雰囲気が形成されている。

とした上で、「ただか」に恋うという表現の背景に漢籍の影響を指摘する。[21]

一方、村山出氏は「香」は文字通り「香（こう）」を表し、当該長歌の表現に聖武朝の「『みやび』にかなった歌心を認めたい」とする。[22]

本稿でも「直香」という表記に「香」の意味を読み取ることに関しては両氏の説に従いたいが、それがその人に固有の雰囲気のようなものなのか、文字通りの「香」なのかを判断する決め手は今のところない。しかし、「直に見渡す」「直に逢ふ」という反歌の表現を併せて考えるなら、当該作品の「ただか」は〈妹の存在を直接的に五感で感じさせるもの〉なのではないかと思われる。

そのことは、垢染みた衣を見ては妹への恋情を掻き立てられていた〈我〉が恋うる対象として「妹がただか」が詠まれていることから確認できるであろう。当該作品に詠まれているのは抽象的な恋ではなく、直接「逢ふ」ことへの希求という、具体的で肉感的な恋情なのである。

当該作品の〈我〉は、自らが置かれた状況とそれによって増す恋情の激しさを歌う。そのような〈我〉は巧みに設定された、ある種誇張された存在である。「山上復有山」の戯書や、「直」という表記の繰り返しなど、当該作品には多分に文芸的な要素が指摘できるであろう。

しかし、それと同時に、「大君の命恐み」旅寝を余儀なくされる律令官人にとって、〈我〉の状況は決して他人事ではなく、自らの身に置き換えて考え得るものだったのではないだろうか。

垢染みた衣を身にまとい、ひたすら「妹がただか」を恋い、「直に逢ふ」ことを切望する〈我〉は、生身の肉体を具えた存在である。それは、文字通り「うつせみの世の人」として、この世に生きる存在である。長歌冒頭「うつせみの世の人なれば」は、この、生身を具えた人間としての恋情を抑えられない〈我〉という存在をも規定する働きをしているのではないだろうか。すなわち、「うつせみの世の人」として一方では「大君の命恐み」旅寝を余儀なくされることを受け入れ、もう一方では生身の人間としての恋情を抑えがたいと歌っているのである。

五

以上、当該作品に詠まれた恋情について考察してきた。ここには、都にほど近い布留の地で旅寝を余儀なくされる男性官人の、都に残してきた「妹」への恋情が詠まれているが、それは「妹がただか」に恋い、「直に逢ふ」ことを願うという、生身の「妹」への恋情であった。このような恋情は、都を「直に見渡す」ほど近い布留の地にいることや、自らが身に着けている「衣」の垢染みた様などの具体的な状況によって、よりいっそう激しく掻き立てられるのである。いわば、〈我〉が置かれた状況と、その状況によってもたらされる「妹」への激しい恋情を、一組の長歌作品として詠んだのが当該作品である。そして、このような当該作品のありかたを規定しているのが、長歌冒頭の「うつせみの世の人なれば」という表現であった。

先にも触れたように、この「うつせみの世の人なれば」という表現は金村作品に他に二例あるが、それらは女性の立場から自分に

とって恋しい男性を「うつせみの世の人」として捉えた表現であり、「うつせみの世の人」として「大君の命恐み」旅立つ男性を見送るものである。そこには自分の思う相手が「うつせみの世の人」である宿命として、離別を受け入れる女性の姿がある。詳しくは別稿[23]に譲るが、そうした女性の存在は、「大君の命」に従わざるを得ない存在として一括りに捉えられかねない男性官人が、私的な場面においてはかけがえのない個人としてあることを保証するものであった。

一方で、当該作品では男性官人が自らを「うつせみの世の人」と定義している。「うつせみの世の人」である故に旅寝を余儀なくされ、「うつせみの世の人」である故に「妹」への恋情を抑えられない存在として、〈我〉は詠まれている。

このような「うつせみの世の人」のあり方は、先述したように金村作品における「もののふの八十伴の緒」とは異なるものである。また、

…ますらをの　心はなしに　たわやめの　思ひたわみて　たもとほり　我はそ恋ふる　舟梶をなみ（6・九三五　「神亀三年秋九月、播磨国印南野行幸歌」）

とある「ますらを」のような、「たわやめ」とは対照的に雄々しさが求められる存在とも異なる。生身の肉体を具えて私的な恋情に苦しむ弱い存在としての面も持った存在として、当該作品の「うつせみの世の人」はあると言えよう。

「うつせみの世の人」である故に「大君の命」に従わなければならないと歌うとき、たしかにそこに諦念や閉塞感といったものを見出すことも可能であろう。しかし、一方で生身の人間としての欲望を歌い上げ、抑えがたい恋情を主題として成立している当該作品において、「うつせみの世の人」であることは決して否定的に捉えられているだけではない。夜も眠れないほどに募る「妹」への思いを抱えた〈我〉は、その苦しさの故に、より強く生きていることを実感できるはずである。そのような〈我〉に自らを重ね合わせることで、律令官人たちもこの世の存在としての自己を認識・確認したのではないだろうか。言い換えれば、「うつせみの世の人なれば」という定義によって、公と私の二面性を生きる〈律令官人としての自己〉というものを新たに創造したのが当該作品だったのである。

注

（1）拙稿「志貴親王挽歌試論」（『国語国文研究』一〇七　一九九七年十一月）、「『旅を宣しと』――笠金村『娘子に誂へられて作る歌』についての考察――」（『日本文学』五四―九　二〇〇五年九月）など

（2）先行研究については村山出「笠金村の天平元年十二月歌」（『万葉集研究』二九　二〇〇七年　塙書房）に詳しく整理されている

（3）土屋文明『万葉集私注』

（4）金井清一『万葉集全注　巻第九』

（5）稲岡耕二『和歌文学大系　万葉集（二）』

（6）一四五三番歌については、『代匠記』による補入に従う

(7) 青木生子「万葉集における『うつせ（そ）み』」（青木生子著作集四『万葉挽歌論』一九九八年　おうふう　初出一九六七年二月）

(8) 川崎庸之「大王と大夫」（川崎庸之歴史著作選集一『記紀万葉の世界』一九八二年　東大出版会　初出一九七八年十一月）

(9) 梶川信行「越道の望郷歌群」（『万葉史の論　笠金村』一九八七年　おうふう　初出一九八一年四月）

(10) 井ノ口史「金村の巻九・相聞長歌二首」（『セミナー　万葉の歌人と作品』六　二〇〇〇年　和泉書院）

(11) 村山氏前掲論文

(12) 大野晋「『うつせみ』の語義に就いて」（『文学』一五―二　一九四七年二月）

(13) 拙稿「『人となることは難きを』――笠金村『神亀五年戊辰秋八月の歌』についての考察――」（『国語国文研究』一四〇　二〇一一年九月）

(14) 本居宣長『国号考』（『本居宣長全集』第八巻　一九七二年　筑摩書房）

(15) 久米常民『万葉集全注　巻第十三』は、三二四八番歌については編者が日本全体と考えて巻十三相聞の冒頭に置いたとし、三三二六番歌については原文「日本国」とあることから、「ここは大和一国を指すと思われるが、表記者は日本を意識していたのであろう」とする

(16) 梶川信行「笠金村と石上乙麻呂」（『万葉史の論　笠金村』一九八七年　おうふう　初出一九八六年十二月）、井ノ口氏前掲論文、村山氏前掲論文など

(17) 坂本信幸「軍王の山を見る歌」（『セミナー　万葉の歌人と作品』一　一九九九年　和泉書院）は「旅にある者にとって、家・妹との間を隔てるものの代表」として「山」が詠まれることを指摘している

(18) 原田貞義「万葉集の私家集序説」（岩手大学教育学部『研究年報』二八　一九六九年一月）、梶川信行「金村歌集の論」（『万葉史の論　笠金村』一九八七年　おうふう　初出一九七九年三月）など

(19) 梶川氏前掲16論文、井ノ口氏前掲論文、村山氏前掲論文など

(20) 集中で「ただ（に）」の表記に「直」が用いられるのは一般的であるが、「ただか」の集中での用例六例中、仮名書きの一例（17・四〇〇八）を除くと、「直香」と表記するものは当該例と巻四・六九七番歌、「正香」と表記するものは巻十三に三例（三二九三、三三〇四、三三三三）で、しばしば指摘される金村作品と巻十三の歌との表現面での類似を考慮するなら、当該作品ではあえて「直香」の表記が選ばれたと考えられる

(21) 坂本信幸「巻一・二五番の天武天皇御製歌の成立過程について」（『万葉』一四五　一九九三年一月）

(22) 村山氏前掲論文

(23) 巻九・一七八五番歌については注(13)の拙稿ですでに論じており、巻八・一四五三番歌については稿を改めて論じる予定である

＊ 万葉集の本文の引用は『万葉集　CD-ROM版』（塙書房）に拠った

（くらもち　しのぶ・旭川工業高等専門学校准教授）